

「 さ さ え 」

2005, 1月発行 情報誌 第10号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所 / 福岡県田川市伊田4395 (福岡県立大学生涯福祉研究センタ - 内)

TEL / FAX 0947 - 42 - 2286

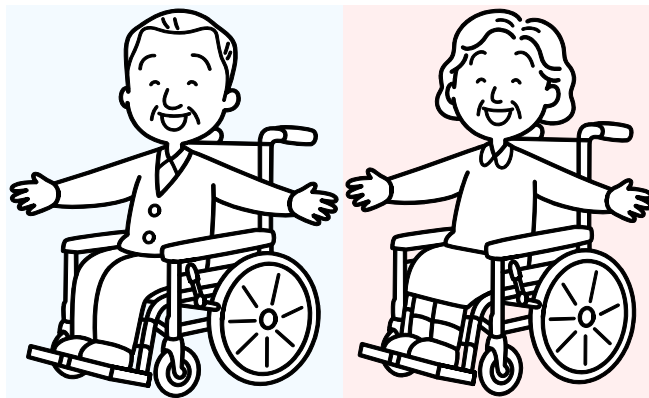
E - mail npo-fukusiyounet@sage.ocn.ne.jp

HP <http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

福祉用具はあなたの自立をさえます

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします



小さな芽を

すこやかに育てたい



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

NPO 福祉用具ネットのロゴマークは明石尚典さんのデザインです。

いつから販売されますか？

理事長 豊田 謙二（福岡県立大学教授）

昨秋に、私どもの開発した福祉用具、自立支援型床ずれ予防マット「ピーウェーブ（P・Wave）」を、東京ビッグサイトと北九州市で開催された国際福祉機器展に順次展示しました。

幸いにもわがブースは来場者に恵まれ、また多くの方に「ピーウェーブ」への強い関心を持っていただきました。来場者からは「価格はいくらですか？」、「いつから販売されますか？」というありがたいご質問もいただきました。

「ピーウェーブ」は従来型の床ずれマットとは異なる設計の考え方によって製作されました。「**床ずれ予防**」の機能に加えて、眠りの「**快適性**」とベッドから車いすへの移乗を可能とした「**自立支援**」の機能を備えています。そのコンセプトを「ピーウェーブ」の中に実現される努力をされた関係者の方々に深い敬意を払います。

私どもはまもなくこの「ピーウェーブ」の販売を始めますが、その開発の目的は利益の追求ではありません。わが「NPO福祉用具ネット」は、非営利を特長とする組織であります。また、「自立支援」という公益的活動を事業活動の主たる目的と定めています。「ピーウェーブ」の開発と製作は、その「自立支援」の活動の一環であります。

そうは申ししても、継続的な公益的活動を進めるためには運営・事業経費、つまり安定的な収入は不可欠であります。本NPOは法人化後3年になりますが、財政基盤の確立は当初から重要な課題であります。今日、大山事務局長の献身的な努力によって、かろうじて命を永らえている状態です。大山さんはさすがに名看護師、本NPOの脈をとりながら、時にはカンフル注射で生命を呼び戻してはいますが、それも限界がきております。今年度は本NPOの存続をかけた組織の見直しが必要であります。

「いつから販売しますか？」という問いに言葉を飲み込みました。その問いは本NPO活動への賛同と期待なのだとうれしく感謝しつつ、前進することにひるむわが心への叱咤でもありました。年頭にあたりまして、改めて皆様に感謝を申し上げますとともに、今後とも一層のご助力とご支援をお願い申し上げます。



昨年10月に東京ビッグサイトで開催された東京国際福祉機器展のようす
国内外14カ国1地域645社・団体が出展 来場者数138,726人（3日間）

福祉用具と介護保険制度について

佐賀大学 医学部附属地域医療科学教育研究センター

福祉健康科学部門 助教授 松尾清美

介護保険が施行されて5年が経過しようとしている。介護保険の対象者の方々の生活状況を見て見ると、要介護度1～3の方は歩行で生活できる方で、要介護度4～5の方は歩行できないか痴呆があるため、寝たきりになっている方が多いというイメージを持っている。このことは、統計にも現れている。介護保険で使われている福祉用具は、ベッドと車いすおよびそれらの関連器具で85%強、他の福祉用具の使用比率が10%程度である。また、要介護度1～3の方々の生活範囲は、家の中での生活を中心としており、病院などで外出する程度であまり外には出ていない。介護保険を使った住宅改修はこの範囲の要介護度の方々が85%強である。要介護度4～5の方々では、福祉用具を使用する方も少なく、住宅改修を行う方も住宅改修を行った方々の10%程度を占める程度なのである。その結果、住宅家の中でもベッドや布団で過ごしているのである。介護保険の5年間を斜めに見ると、「動けないからしかたない」という考え方で、介護者の都合による生活になりがちであり、人の手による生活支援を完成させようとしているとしか言えない。自立（律）を目指した介護保険に切り替えていかなければならない。

そのためにNPO福祉用具ネットは、行政や市民や県民の協力を得ながら、ケアマネジャーや本人、生活支援に関わる看護師やOT、PT、ヘルパー、社会福祉士、介護福祉士などに、福祉用具の選び方・使い方や適合・調整の仕方を伝達することが大切である。また、ケアマネジャーや福祉住環境コーディネーター、本人、建築士、大工などへ、住宅における身体機能と道具、環境との関係を伝達していかなければならないと考えている。また、既存の福祉用具で不足あるいは不十分な場合は開発しているのである。

そうすることで、市民県民の税金や保険金を有効に、無駄を少なくして活かすことができると考えている。何故なら、次のことが言えるからである。

1. 寝たきりで過ごすよりも車いすを使ってでも自分で動いて過ごすことで、手や顔を洗ったり、散歩したり、他の方々とコミュニケーションがとれるなど、脳への刺激が多く入り、健康に良い。明日への目的や希望、生き甲斐を持ちやすい。
2. 重度障害者が施設に入ると、お一人へ負担される公的資金の額は月々20～40万円台であるが、在宅で生活される場合は月々8万円程度である。在宅でいきいき生活して頂くお手伝いをすることは、本人たちの生活の質を向上させるばかりでなく、社会的負担を軽減させることになり、社会に貢献することにもなる。
3. 皆が将来に渡って、福祉用具や住宅改修を活用することで、自立（律）を目指す方法を知れば、身体に障害が生じても生き生き生活者が増え、ひいては1.4人で一人の高齢者を支えなければならないと言われる子孫達の精神的・肉体的負担を軽減できる。

NPO福祉用具ネットが目指しているこの壮大な計画は、行政だけでなく、多くの県民と市民の理解と協力が無ければ遂行できないものである。皆さんの協力をお願い致します。

今、思うこと。「福祉用具の開発に王道なし」(その1)

九州日立マクセル(株)新分野開発PT長 坂田 栄二

私共は、この筑豊の地に産炭地企業誘致で進出してきて今年で35年目を迎え、その間ずっと家電品を開発・生産してまいりました。

家電品は、皆様に快適な暮らしをしていただくための道具で、まず市場のニーズを捉え、それに応える技術の開発を行い、その成果を商品として具現化したものです。これまで、これらの多くの商品は世界のどの国においても、健常者向けであり、障害者を意識したものは数えるほどしかありません。それはマーケティングをする際に特定の人を意識せず、最大公約数的な群(ぐん)のニーズとして捉え、その群に応える商品を作るためです。このため、たとえば壁掛けテレビや扇風機などは、背丈の低い人には使い辛いことになってきますが、健常者は踏み台やイスを真下に持ってきて、自分で不具合を解消してその上に昇り、自在にチャンネルを操作できるのです。しかしこの例では、群から外れた人々にとっては使いたくても使えないものとなっていました。メーカーはその不具合に眼をつむり(?)大量生産にまい進して来ましたが。

ところが、近年のバリアフリーやユニバーサルデザインが叫ばれるようになって商品形態が徐々に変化しつつあります。この流れはサイズ、形状だけでなく、色、質感、重量などさまざまな設計事項に配慮がなされるようになってきました。

これらは、テレビや洗濯機などのこれまでの家電品を誰もが使えるように使い勝手を重視して、使っていても戸惑いやストレスを感じさせないように設計したいいわゆる「ユーザビリティ」主体の開発です。その結果たとえば壁掛けテレビの「リモコン」は踏み台を持ってこなくても、背の低い子供やお年寄りが楽に操作できるだけでなく、健常者でも好んで使えるということで今では「リモコン」は当たり前の商品形態になっています。

電話のプッシュホンも同様です。穴の開いた丸いダイヤルに指を差込みぐるぐると回すのは健常者でも大変です。今ではそんな電話を探すことも難しくなっています。携帯電話でも「ピッ、ポッ、パッ」と押すだけで済みます。

このような商品は、共用品的でユーザビリティが高いといわれていますが、市場で求められているものは、そのようなものばかりではなく障害者に専用に開発が要求されるものがあります。今、私共はそのような商品の開発に取り組んでいます。

今から7年前、当社はバブル崩壊後の手詰まりの市場打開のために、新規進出分野を模索し、その中から選択して集中開発しました。

そのとき作成した資料が図1です。

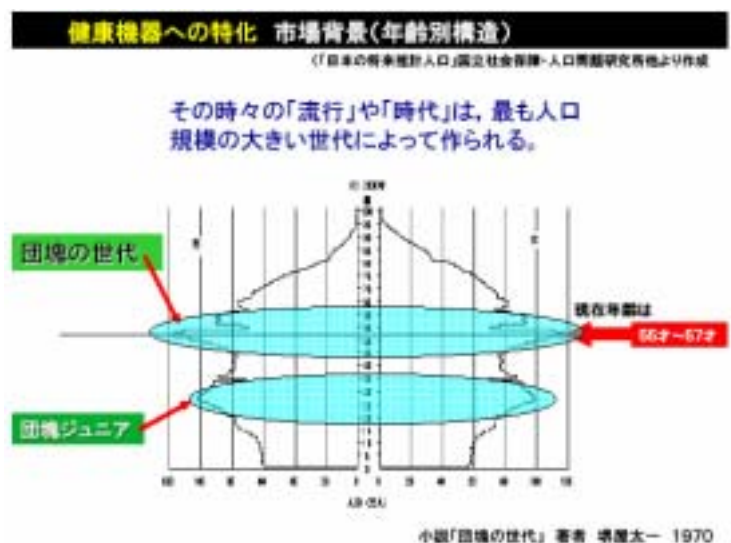


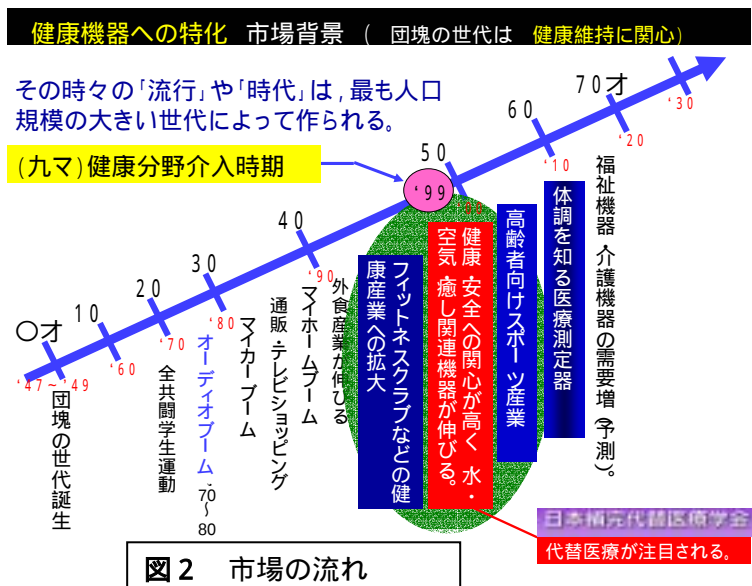
図1 人口動態図

56歳～57歳の男女人口が他の世代に比べて飛びぬけて多いことがうかがえます。小説家でもある堺屋太一氏は、この特異世代を「団塊の世代」と名づけたのです。

この世代の人たちの購買意欲は現在でも大きく、市場に対して影響力を持っております。そこでこの世代の人たちがこれまでどのような影響を与えてきたかを時代とともに追跡したのが図2です。

戦後、ブームというものが何度ありました。その中身を見てみますといずれも団塊世代の人たちの年齢とともに生まれているのです。たとえば団塊の世代が20歳台のときの空前のオーディオブーム、30歳台のときのマイカーブームなどが象徴しております。そして今この人たちが健康管理を最重点事項として取り組んでいるのです。そこで私共も団塊世代の自己健康管理意識の高まりに応えるべくアルカリイオン整水器やマッサージチェアを開発・供給してきました。しかもこの開発と並行して、団塊世代が更に10歳、年をとって高齢化したときを想定して、福祉機器の開発にも着手しました。

(次号“ささえ”11号につづく)



■方城温泉「ふじ湯の里」オープン

(昨年2004年11月25日)

福知山の裾野地下1500mからの天然湯で、源泉かけ流し方式は北九州唯一と言われており、特に皮膚を健康にする美人湯であります。施設の特長は誰でも楽しめる温泉場、即ち障害者・健常者も一緒に入浴を楽しめる家族風呂があり、全館が高齢者にもやさしいバリアフリーで、これらの部分については「NPO 福祉用具ネット」のプロジェクトが支援した成果でもあります。

(福祉SDグループ 松原 昌三)



完成した「ふじ湯の里」



障害者対応の家族風呂

- ・住所 田川郡方城町大字弁城上の原 1300 - 1
- ・営業時間 10:00～22:00

- ・電話 0947 - 22 - 6667
- ・定休日 第3月曜日



何度教えてもできないのは、何がわるいの？

中藤広美 福岡県立大学生涯福祉研究センター助手

「うちの子は、何度同じ事を教えてもできないんです。」「うちの子は1人でトイレに行くと必ず失敗します。」等という、親ごさんの声を耳にすることが時々あります。何度同じ事を注意してもできない。その子が、注意を聞き入れることなく、気をつけていないから失敗しているのでしょうか？その子どもにやる気がないからできていないのでしょうか？子どもは「できるようになりたい」「もっと、成長したい」と思っているはずです。

私たち大人は、子ども達のそういった伸びようとする力を支え援助する立場にあります。そこで、闇雲に教え込もうとムキになるのではなく、ちょっと冷静に子どもの様子を見つめてみましょう。何かが分かってくるはずです。

ここで、「1人でトイレに行くと必ず失敗する」というA子さんの例で考えてみましょう。

A子さんのお母さんにお話をよく聞き、失敗の内容を確認すると、「スカート濡らす」という事でした。そこで、彼女がトイレで用を足すための行動を分析してみると下の表のような細かい動作があることがわかりました。左の枠の中がおシッコをするまでの行動、右の枠の中がおシッコの後始末からトイレを出るまでの行動です。なぜできないのかを考えると、このように行動を分析してよく観察してみると何かが分かってきます。

そこで、分析をしてみて分かったことは、実はA子さんは、この行動の全てができていないのではないのです。できていないのは、左の枠の中のおシッコをするまでの行動の内、「上げたすそを落ちないように固定する」という部分のみでした。他の行動はキチンとできていたのです。そこで、A子さんに何を具体的に援助してあげればよいかが分かってきますよね。「上げたすそを落ちないように固定する」方法を、彼女ができそうな環境設定、道具を使うなど様々な工夫を考え、与えていけば良いのです。すると、彼女も毎回スカートが濡れて気持ちの悪い思いをしなくて済みます。

彼女は、「何度いわれてもできない、しない」のではなく、「上げたすそを落ちないように固定する」

A子さんのトイレ行動の分析

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none">• トイレのドアを開ける• トイレのドアを閉める• 便器をまたぐ• スカートのすそを上げる• 上げたすそを落ちないように固定する• パンツを下ろす• 便器にしゃがむ• 排尿する | <ul style="list-style-type: none">• ティッシュで拭く• 水を流す• 立ち上がる• パンツを上げる• スカートを下ろす• またいでいたのを元に戻す• トイレのドアを開ける• 外に出る• トイレのドアを閉める |
|--|--|

コツが分からなかったから「1人でトイレに行くと必ず失敗する」のでした。子どもに何度教えてもできないとき、受け容れてくれないときには、イライラしそうになったり、落ち込みそうになることがあります。その様なときに、ちょっと冷静になってみて、「行動を分析」して、「何ができていないのか」を明らかにし、そこで具体的な援助方法を見つけ出すということもよいと思います。

ネットワークにささえられて

事務局 大山 美智江

新年おめでとうございます。

NPO福祉用具ネットは設立準備から4年目を迎えました。100名以上いる会員をコーディネートすることとネットワークの核となり「人おこし」を目指し活動しています。最近では田川地域だけでなく飯塚方面からも事業に参加していただける方が多くなりました。NPOの会員となってささえられている方やボランティアとして活動していただいている方などの「ささえ」によって運営ができていることを感謝しています。今年もよろしくお願いいたします。

次年度の研修会等に対するご意見やご希望がございましたら事務局までご連絡下さいますようお願いいたします。（TEL/FAX 0947-42-2286 又はメールでも可）

【4月から12月までに行った主な事業】

	主 な 事 業
4月	情報誌「ささえ7号」発行 理事会
5月	通常総会 クローバープラザ出展
6月	介護者研修会「訪問介護と記録」前半の部 パート1 理事会
7月	ケアプラン研修会「住環境整備とプランニング演習」 パート1 介護者研修会「訪問介護と記録」前半の部 パート2 情報誌「ささえ8号」発行 糸田町福祉のまちづくり計画事業の現地調査開始
8月	福祉用具研修会「移乗研修」
9月	福祉用具研修会 「在宅における床ずれの予防とケア・床ずれ予防用具について」 ケアプラン研修会「住環境整備とプランニング演習」パート2 理事会
10月	東京国際福祉機器展出展 情報誌「ささえ9号」発行 KBCテレビ「ネットワークふくおか」でNPO福祉用具ネットの活動を紹介
11月～ 12月	西日本国際福祉機器展出展 介護者研修会「訪問介護と記録」後半の部 パート1 ホームヘルパー養成講座委託事業開始（11月から12月） （12月に予定していた介護者研修会パート2は講師の都合で延期しました。）

その他、産炭センター助成事業による福祉用具開発事業、電話無料相談、コンサルタント事業など

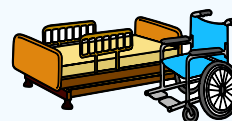
NPO福祉用具ネットの常設展示場が 1月15日からオープン！

産炭センターからの助成を受けて開発した床ずれ予防マット「P・Weve」が今年3月に発売決定しました。太陽セランド（株）様のご好意により、NPO福祉用具ネットの常設展示場が田川市川宮の太陽セランド（株）のショールーム内にオープンすることになりました。

皆様のご来場をお待ちしています。

ショールームは土・日を除く毎日、9時から17時までオープンしています。

お問い合わせ 0947-44-1895



事務局より

会員の更新手続きのご案内と新年度の新規会員を募集しています！

事業年度は毎年4月から翌年3月までです。

*** 会員の皆様は、引き続き次年度の更新手続きをして下さいますようお願いいたします。**

個人年会費 4,000円

団体年会費 30,000円

賛助会員は1口 3,000円

*** 新年度の始まりです。NPO福祉用具ネットの新会員を募集しています。**

会員になると会員価格で研修会を受講できるなどのメリットがあります。

個人入会金 1,000円 年会費 4,000 合計 5,000円

団体入会金 2,000円 年会費 30,000 合計 32,000円

賛助会員 1口 3,000円

*** 福祉用具・住宅改修の電話相談は無料です。是非ご利用ください。**

電話 0947-42-2286 （月曜日～金曜日 午後1時から4時まで）

入会に関するお問い合わせは事務局までご連絡ください。また、NPO福祉用具ネットの活動状況は、ホームページで詳しくご覧いただけます。ホームページは随時更新していますので是非一度覗いて見てください。アドレスは表紙をご参照ください。



NPO福祉用具ネットは「アットホームこころ」の開設に伴ない、コンサルタントを行っています。

入居者募集中 お問い合わせは 0947-44-6330 担当 木村